

実際の地震体験から感じた情報の信憑性

Credibility of information felt from actual earthquake experience

池田 健人

中京大学大学院社会学研究科修士課程

1. はじめに

1月1日石川県能登半島で震度7の大地震が発生した。私は、石川の親戚の家にいた。当時、親戚と買い物の途中で地震に遭遇した。これは、地震で実際に体験したものと今回の地震で考えさせられた情報の信憑性について述べていく。

2. 地震の体験

地震を体験した時は、体感横揺れで2分間であった。幸い買い物の途中であったが周りに何も無いような場所にいたので地震の揺れを体験しただけであったが、地震が起きた後の周りの状態はまるで2分前とは別世界にいると勘違いするくらい光景が変わっていた。地震が起きた直後、すぐに逃げなければならなかったが情報を得ることが難しかった。なぜなら回線が地震の影響で悪かったからだ。そのため私は自分で情報を得るのではなく、他の人たちに情報をもらえるのかを頼んだ。そのために様々なSNSを使って情報をもらった。(注1) その情報から私たちは最新の情報をいち早く入手でき、安全に避難することが出来た。当時の状況を振り返ると自分たちは運が良かったと言えるような状況が多いことに気付いた。情報をいち早く得られるように動いてくれた友人や今までネットの中でしかつなげていなかった友人に感謝したい。避難所まで行くことが出来たが私にとって避難所について当初の最初の夜が一番印象に残っている。

大きな地震を体感すると実際の小さな揺れであっても過敏に反応する。それは、自分の意識とは関係なく反応する。避難所について頃、ロビーのところに人が多く集まっておりゆれなどから逃げるために入り口付近にいた。携

帯に備わっている緊急地震速報によって避難所から何回も出た。緊急地震速報に出ていなくても実際に揺れを感じて外に出たことが多かった。当時は冬であったので外に出たらかなり寒かった。また暖房などをつけることが出来なかったので毛布とカイロで寒さをしのいでいた。寒さと揺れに対する反応によって寝ようとしたとしても身体が勝手に起きる。この当時の状況を振り返るとなぜその時は全く疲れを感じていなかったのかが不思議であった。

避難所で情報を安心して見られるようになった時、自分は違和感を感じた。SNSを見てみると多くの救助申請に似たような助けてという投稿が多く見られた。この投稿を見たときにいち早く助けてほしいから出しているのだと感じた。確かに本当の人もいる。だが、投稿数が多すぎると感じた。この投稿の多さから実際の情報とは別に偽の情報が混じっているということが実際に愛知県に帰宅できたあとに感じた。これは愛知県に帰宅した後のことになるが、その偽の情報によって実際に必要な情報が届きづらいような状況になってしまっていると感じた。これが当時だと偽の避難情報が出ていたと感じると情報の真偽を地震が起きた状況で判断する事は出来ない。

この地震の体験から情報の大切さ、つながりの大切さを感じる事が出来た。今回はその中でも情報の信憑性の部分に注目して述べていく。

3. 情報の信憑性

インターネットは日々ものすごい速さで発展している。インターネットによって私たちの生活の身近に情報が伴うようになった。そしてその情報によって私たちの様々な恩恵を受けている。災害時であったとしても同様である。いち早く情報を得られることによって最速でなおかつ安全に避難する事が出来る。今回の石川の震災によってもその恩恵を得ることが出来た。だが、その恩恵を得るための情報が嘘なのかもしれない。

そもそもフェイク情報というものは定義が難しい（河野 2020）。今回の石川県の震災にはかなりの数のフェイク情報が流れていた。そのために本当の情報があまり現地に届きづらくなっている状態になっていた。なぜこのような状態になっているのか。その要因はSNSの発達によるインプレッション（通称インプ）稼ぎではないかと考えられる。これは今の時代の背景も投影されているように感じる。SNSは個人のプライベートな情報を発信することが出来る。またその発信した情報によって世間からの注目を集めること

ができれば、有名になることが出来る。有名になることによって今の若者たちにとっては楽にお金を稼げるかもしれないという幻想につながっているのかもしれない。そのためには、SNSにおいて強い印象を与えなければならない。その印象を数値化したものがインプである。インプの数値が高ければ高いほど多くの人に見られている。つまり注目されているという状態になる。

強い印象を与えるためにはどのようにすればよいのか。強い印象を与えるためにはみんなが思わず見てしまうような情報が必要になる。そのために実際に体験した話よりも嘘をつくことによって強い印象を与えたほうが良い。ただ嘘をつくのではなく、実際に起きたことと紐づけることによってあたかも実際に起こったことのように見せる。この情報の難しい点として実際の情報と紐づいているので真偽の判断が難しい。今回の震災はこのようなフェイク情報を作成することが容易である。なぜなら確認する手段が少ないからである。当時現場にいた体験から情報を集めることも重要であるが、逃げるのが第一優先になるので確認するという段階を飛ばす。また実際にその場にはいない人でもその場にいるかもしれない情報を見逃すことがあまりできない。そしてその情報を拡散してしまう。

災害時における情報というものは恩恵を最も感じる事が出来る。だが、今の時代の SNS の運用やそれに対しての効果というものが今回の災害をコンテンツ化させてしまっているのかもしれない。このコンテンツ化によって情報自体にも信憑性が低くなる。この信憑性が低くなる要因としてインプを稼ぐことが関係していると私は思っている。

4. メディアリテラシー

今回の震災の時に出てくるフェイク情報というものは5つに分けることが出来る。被害情報、実際にあるかわからない救助要請、寄付募集、犯罪情報、その他である。その中でもより多く見られるのが被害情報である。被害情報によって避難の方法が制限される。また最速で逃げるためにも被害の情報は必須である。3で述べた観点から最もみんなに見られる情報は被害情報である。そのためここには虚偽の報告が出やすい。理由はインプの数値を伸ばしやすいからである。

そのためにも震災の際にどのように情報の真偽を見極めればよいのか。その際にメディアリテラシーという言葉がある。メディアリテラシーとは3つ

の能力を複合的に合わせた能力である。メディアを主体的に読み解く能力。メディアにアクセスし、活用する能力。メディアを通じコミュニケーションする能力。特に、情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力。（総務省 HP より引用）とされている。災害の情報において実際にその場にいる人たちにとってそのように真偽の判断が出来るのだろうか。実際に体験したところ私自身の実感では、出来ない。ならば実際に情報の受け取り側が工夫をするのではなく、発信する側 SNS などの仕組みに対して対処をする方がより安全であると私は考える。

災害時の情報を実際にその場にいる人に対して真偽を判断するのではなく、情報の発信側や SNS のシステムに対して情報の真偽を担ってもらう方が良い。SNS のシステム側の一つの提案として虚偽の情報を発信できないようにするという方法があるが、それには問題がある。それは「表現の自由」だ。河野（2020）がフェイクニュースと表現の自由について述べているように実際の法規制や対象となる人に対してもあまり明確になっていない。これは表現の自由を全員が納得する形にしてなおかつ虚偽の情報を発信できないようにするのは、難しい問題なのである。私が提案することは、災害情報を一括で表示してくれる国が運営する災害情報がまとめられた HP を作る事が一番有効であると考え。なぜ国が運営するものにしたのか。それは国が運営しているものと分かれば、実際にその情報の信用性を得ることが出来るからである。国が運営することによって信用性に関しては保証されているということをアピールすることが出来る。だが、これにも問題点がある。どのように情報を集めるかである。災害の際に必要なものは速さである。情報次第で避難の方法や場所が決まる。信用性の観点において国が運営するサイトから見られれば安全であるということは良いが、その情報が遅かったら意味がない。それに対してどのように対処していくのが問題点として残る。この問題点に対しての対処としては、全国に人を配置する事であるが、とても現実に行える対処法ではない。そのための最新技術である。ドローンの活用が現在最も実行可能な対処法であり安全であると私は考える。実際に見える情報と安全性この二つの観点から情報を集めるためのドローンの活用が一番安全であり、最速である。

5. さいごに

今回の地震体験で実際に起こることと情報の価値というものに触れることが出来た。情報によって私たちの生活の豊かさも変わった。そして災害においても情報によって安全になおかつ最速に避難することもできるようになった。だが、情報というものの影響は良い面ばかりではない。情報というものはすべてが正確な情報というものではなく、個人の主観や注目させるための情報も紛れている。その情報は時によっては正確な情報よりも目立つ。今回の地震体験によって正確な情報をいかに早くなおかつ信用できる情報をその場に送ることの難しさと重要性を認識した。このことを対処するために自分が提案する対処法に関して述べてきた。

文面で調べる地震の恐怖と実際に体験する地震の恐怖は違う。情報の重要性においても同じことが言えるかもしれない。これが信憑性にもつながってくるのかもしれない。今は私たちが情報の受け手にもなれるし発信側にもなれる。情報の恩恵を最大限に受けるために私たちは今一度情報について立ち止まって考える必要がある。また情報との付き合い方のみではなく、発信する側やシステムも自分たちで理解する必要がある。今回の体験から情報との向き合い方を変えるきっかけになった。

〈参考・引用資料〉

- ・河野 康輝 「フェイクニュースと表現の自由」 九州大学学術情報リポジトリ 2020 16p
- ・総務省 「放送分野におけるメディアリテラシー」総務省 2024 年 1 月 24 日 URL: 総務省 | 放送分野におけるメディアリテラシー (soumu.go.jp)
- ・古田 大輔 ジャパンファクトセンター「能登半島地震」災害時に広がる偽情報 5 つの類型 地震や津波に関するデマはどう拡散するのか」 2024 年 1 月 25 日 URL: (能登半島地震) 災害時に広がる偽情報 5 つの類型 地震や津波に関するデマはどう拡散するのか (factcheckcenter.jp)